

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 倉敷 茂

倉敷茂氏が提出した論文の題名は『美的主体の精神譜 — 大正後期から昭和初頭に見る芸術運動とコミュニティ』である。ここで言う「美的主体」とは有島武郎が「私の生命は」「私のものだ」と述べ「私はこの生命を私の思うように生きる」と『惜しみなく愛は奪う』の中で宣言したような、1920年代の日本の表現者に特有な主体のモデルのことである。

本論文の第一章では、プロレタリア文学の先駆者としての宮島資夫の作品を中心に、社会制度に困惑と反発しか覚えなない脱社会的な人間像の中に、日本におけるテロリズムの水腫が発見されている。第二章では、萩原恭次郎と今和次郎を中心に、都市空間のモデルの中における自我の構成の様態が分析されている。第三章では、柳宗悦における風土とコミュニティの問題を分析し、自然の産出力が匿名の集合から現われるという特異な考え方を抽出している。第四章では江戸川乱歩などにおいて形象化された「個室」を、非社会的なユートピアの夢を育む非一場所として分析している。第五章では、「芸術大衆化論争」を通じての自己創造する主体の問題が明らかにされている。第六章は横光利一の『上海』を対象に映画をモデルとした、都市におけるイメージの政治的経済的分析が行われている。第七章では宮環堅治における「生」と「意識」が、特異な形象と音声の分析をとおして、外的知覚と内的意識の境界を突破する運動であったことが明らかにされる。第八章の保田與重郎を軸としながらも、本論文の結論として、美的主体が保田においてどのように改変され、壊滅していったかという軌跡が論じられている。

それぞれの作家の作品の選択に対する恣意性、各章を貫く論理的一貫性の不十分さ、対象領域が拡散し論文全体の焦点が結びにくいなどの批判が審査の過程でなされたが、博士論文として十分認めうるという判断が共有された。したがって本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。